

令和 6 年 6 月 18 日現在

機関番号：25201

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2023

課題番号：17K03139

研究課題名(和文) 18・19世紀モンゴル語年代記の記述内容の変遷に関する研究

研究課題名(英文) A study on the transition of the contents of Mongolian chronicles in the 18th and 19th centuries

研究代表者

井上 治 (Inoue, Osamu)

島根県立大学・国際関係学部・教授

研究者番号：70287944

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：18・19世紀のモンゴル年代記には、17世紀前半にモンゴル人が満洲人の清朝の統治下に入って以降、モンゴルの歴史家が満洲語、漢語、チベット語習熟し、それらの歴史書から吸収した新しい知識が加わったという特徴が強く見える。漢語の編年体史書やその訳本によって中国上代から元朝の歴史を記述し、評語を添えるなどの漢籍の影響、前代に増してチベット王統史・教法史を活用した年代記も存在する。18・19世紀モンゴル年代記に強くあらわれているのは、信用に値しない旧来のモンゴル年代記の記す説話的要素を可能な限り廃したり、古代中国の歴史にあわせてモンゴル史を再構成し評価を試みるなどの、科学性を津給した側面もみえる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

18・19世紀のモンゴル年代記にかんする研究は従来から存在しており、一定の成果を収めてきた。本研究が目指したところは、18・19世紀以前のモンゴル年代記の特徴をとらえ、それと18・19世紀のモンゴル年代記が異なる点を明らかにしながら、各年代記間に叙述の発想や方法に継承関係があるかを示すことにある。18・19世紀のモンゴル年代記には一定の歴史学的進展があり、史料批判の精神が発露しているなどのことを明らかにした点に一定の研究上の意義を認めつつも、文献所蔵機関がもつ良本により、安定したテキストを再構成し、それによって記述内容の継承関係を明らかにするまでには至れなかったことを遺憾とする。

研究成果の概要(英文)：Mongolian chronicles of the 18th and 19th centuries show a strong characteristic that since the Mongols came under the rule of the Qing Dynasty in the first half of the 17th century, Mongolian historians have become proficient in Manchu, Chinese, and Tibetan, and have absorbed new knowledge from these historical texts. Some chronicles are influenced by Chinese classical histories, using of Chinese chronological historical texts or their translations to describe the history of ancient China to the Yuan Dynasty, and the inclusion of commentary. Some chronicles make more use of Tibetan royal lineage history and religious history than in previous eras. What is strongly evident in 18th and 19th century Mongolian chronicles is the removal of as much of the narrative elements recorded in unreliable older Mongolian chronicles as possible, and the attempt to reconstruct and evaluate Mongolian history in line with ancient Chinese history, which also shows an aspect of scientificity.

研究分野：東洋史学

キーワード：モンゴル年代記 モンゴル史

1. 研究開始当初の背景

現伝するモンゴル人最古の歴史記述は、13世紀後半成書かと思われる『モンゴル秘史(元朝秘史・mongqolun ni'ucha to[b]č'a'an)』である。これは、“上天の命を受けて生まれた”ボルテ・チノからチンギス・ハン誕生までの神話・説話的な祖先記、チンギス・ハンの一代記、ウゲデイ・ハーンの半生記から成る。『モンゴル秘史』の後には200年以上もモンゴルの歴史書は伝わらず、16世紀末にモンゴルにチベット仏教が再伝した際によく『白い歴史(čayan teüke)』が現れた。これは、インドに起こりチベットを経てモンゴルに至った仏教史と、仏法を護持したインドとチベットの聖王らの後にチンギスを配置した王統史とを結合させた“仏法王統史”を記す点で『モンゴル秘史』とは全く異なる。『白い歴史』に続いて17世紀に成ったモンゴル語年代記は、『白い歴史』に似た“仏法王統史”、『モンゴル秘史』に似た祖先記とチンギス一代記、モンゴル帝国と元朝のハーンの仏教的事績、元朝末帝から16世紀の仏教再伝期までの歴史説話、仏教再伝以降のハーンと有力王侯の仏教的事績、著者に連なるハーンや王侯の系譜を記す共通点が存する。この、17世紀にモンゴル語で書かれた年代記を、「17世紀モンゴル語年代記」(以下、17世紀年代記、と略す)と称することにしたい。

長く途絶えていたモンゴルの歴史記述が、16世紀末のモンゴルへのチベット仏教再伝来がもたらした“仏法王統史”によって復活したのが17世紀年代記であると考えられる。このため、ジャムツアラノ『17世紀モンゴル年代記』(Жамцарано, Ц. Ж., *Монгольские летописи XVII века*. Москва, 1936)以来、ペルレー『モンゴル革命以前の時期の歴史文献の問題』(Пэрлээ, Х. *Монголын хувьсгалын өмнөх үеийн түүх бичлэгийн асуудалд*, Улаанбаатар, 1958)、ハイシヒ『モンゴル家族・教法史』第1、2巻(Heissig, Walther. *Die Familien- und Kirchengeschichtsschreibung der Mongolen*. T. 1, 2. Wiesbaden, 1959, 1965)、ビラ『モンゴルの歴史記述(13世紀から17世紀)』(Бира, Ш. *Монгольская историография (XIII-XVII вв.)*. Москва, 1978)、留金鎖『13~17世紀のモンゴルの歴史文献』(liu jin suo. *arban yurba - arban doluduyar jayun-u mongyul-un teüke bičilge*. Kökeqota, 1979)、包文漢ら『モンゴル語歴史文献概述』(包文漢等『蒙文历史文献概述』呼和浩特, 1994)、森川哲雄『モンゴル年代記』(2007)などモンゴル史料の重要な研究のうち、ペルレーを除くいずれもが、その分析と研究の重点を17世紀年代記に置いている。これらの研究が挙げた大きな成果は、17世紀の諸年代記を個別に取り上げて、その版本の分布と優劣を論じ、著者と著年の確定を試み、内容の全体像を示し、特徴のある内容を紹介して分析し、17世紀年代記研究に盤石の基礎を築いた点にある。

本研究課題は、この17世紀年代記に続く「18・19世紀モンゴル語年代記」(以下、18・19世紀年代記、と略す)を扱うことにしている。申請者自身はかつて17世紀の『白い歴史』や『アルタン・ハーン伝(altan qayan-u tuyuji / erdeni tunumal neretü sudur)』の文献学的研究と、『エルデニ・イン・トブチ(蒙古源流. erdeni-yin tobči)』を活用したモンゴル史研究に携わり、18世紀年代記『ガンジス河の流れ(yangy_a-yin urusqal)』に見えるモンゴルの始祖説話記述の変容に興味関心を向けたことがある。既存のモンゴル年代記学を一瞥すると、18・19世紀年代記の研究は17世紀年代記に比べて量的に少ないものの、優れた研究と有益な概説が現れている。

18・19世紀年代記には17世紀年代記には見えない特徴が存すると認められている。それは、17世紀前半にモンゴル人が満洲人の清朝の統治下に入り、モンゴル人知識人が満洲語に習熟し、同じく清の統治下に入った漢人とチベット人の言語と文化にも習熟し、その歴史書から吸収した新しい知識と叙述法が強く反映された点である。『資治通鑑』系の編年体史書や正史の『金史』・『元史』によって中国上代から元朝の歴史を記述し評語を添えるなどに漢文史籍の影響が認められ、チベット語で書かれた王統史や教法史を盛んに利用してインド・チベット・中国・モンゴルの仏教弘通史の量を増やしている。さらに、先行する17世紀年代記の記述を再利用した部分も多い。一方、このような特徴は、当該年代記に独特の記述が少ないことを意味するため、17世紀年代記・漢文史料・チベット史籍・満洲語档案に比して史料的価値が低いと見なされている。こうした状況に新たな視点を与えたのはバザロワ『モンゴル年代記：文化的記念物』(Базарова, Б. З. *Монгольские летописи -- памятники культуры*. Москва, 2006)とツェンディナ『17-19世紀モンゴル年代記』(Цендина, А. Д. *Монгольские летописи XVII-XIX веков : повествовательные традиции*. Москва, 2007)である。これらは、個別の年代記に着目する従来の手法とは異なり、モンゴルの王権に関わる記述の変化や漢籍・チベット典籍の影響などのテーマを定めて、その記述の様を年代記毎に確認することや、モンゴルの伝統的歴史記述・チベット伝来の仏教王統史記述・漢籍伝来の編年体記述の重層化状況を明らかにしたが、王権関連記述の推移や漢籍・チベット典籍の影響の記述様態、記述の重層化の状況を個別の年代記に限定し、説明が断片化している面がある。申請者は、このバザロワらの取り組みを通年代記的・通時的に発展させるとともに、18・19世紀年代記が前近代モンゴル人の史書編纂史において占めるべき価値や意義を見出そうと、本研究を着想した。

2. 研究の目的

著者と著年が明確な 18・19 世紀年代記『ガンジス河の流れ』、『蒙古世系譜 (mongyul borjigid obuy-un teüke)』、『金輪千輻 (altan kürdün mingyan kegesütü)』、『水晶の数珠 (bolur erike)』、『メルゲン・ゲゲン著『黄金史 (altan tobči / altan erike)』、『水晶の鏡 (bolur toli)』、『イシバルダン著『宝の数珠 (erdeni-yin erike)』、『真珠の数珠 (subud erike)』、『ガルダン著『宝の数珠 (erdeni-yin erike)』各々の、著者の出自・著作地・官職僧位などその置かれた立場や著述の環境を可能な限り明らかにする。また、18 世紀年代記の開頭に位置づけられる『ガンジス河の流れ』(1725 年)を基点に、18・19 世紀年代記各々から、各年代記の著者が、先行するモンゴル語年代記やモンゴルの歴史伝承より継承した情報、漢籍・チベット史書・著者固有の情報源より追加した新たな情報、その配列(構成)方法を整理する。そして、これらを手がかりに著者の歴史観をまとめる。ついで、上のように整理しまとめた情報・配列方法・著者の歴史観を 18・19 世紀年代記間で比較して、その異同を明らかにする。この際、一つの年代記が、既存のモンゴル語年代記やモンゴルの歴史伝承・漢文・チベット文史料からどのような情報を、どのような理由で取捨選択して作り上げられたか、そして、その年代記の情報は後継の年代記にどう取捨選択され継承されたかに注意し、継承と変容の観点から 18・19 世紀年代記の各々の通年代記的・通時的な位置づけを明らかにする。

なお、上記の目的を達するため、18・19 世紀年代記に先行する 17 世紀年代記各々の記述内容を把握する必要があるため、先行研究を積極的に利用してまとめておくこととする。

本研究では、次のような特色と独創性をもつ学術的価値と意義を得られるよう努めたい。すなわち、これまで、年代記個別の研究と特定テーマ別の研究が進んできた 18・19 世紀年代記研究の成果を吸収した上で、記述の継承と変容に着目し 18・19 世紀年代記の各々の通年代記的・通時的な位置づけを明らかにするという、オーソドックスではあるが、これまで試みられなかった方法をもってする点に、本研究の学術的独創性が存すると思われる。また申請者が、史料的価値が低いと評される 18・19 世紀年代記を、他民族の歴史家による歴史情報をモンゴル人の歴史家が選択的に受容して自らの歴史を再構築したものであり、異文化の選択的摂取による歴史学的成果として評価し、また別の史料的価値を見出したい。本研究が成功裡に進めば、年代記個別の研究とは一線を画した、19 世紀年代記までの前近代モンゴル人の史書編纂の歴史を描き出し、漢籍やチベット史籍の引き写しが多い 18・19 世紀年代記を、異文化の知識を摂取して自らの歴史を再構築した前近代モンゴル人の歴史学のあり方を示す史料として位置づけることになる。

3. 研究の方法

本研究では、

先行研究を活用して 17 世紀年代記の記述内容を確認する。

著者と著年が明確な 18・19 世紀年代記を読み込み、その内容と著者の出自・著作地・官職僧位など著者と著述の環境を理解する。

18・19 世紀年代記の記述を、先行するモンゴル語年代記やモンゴルの歴史伝承より継承した情報、漢籍・チベット史書・著者固有の情報源より追加した新たな情報に腑分けし、その配列方法を整理しながら、著者の歴史観を発見する。

上で得られた知見を年代記間で比較して異同を明らかにする。

18・19 世紀年代記の記述内容の継承と変容を明確にしつつ、18・19 世紀年代記に通年代記的・通時的な位置づけを与える。

以上の方法を採用し、下のように進行する計画を立てた。

3-1. 史・資料収集 (平成 29~32 年度)

研究代表者は、18・19 世紀年代記の標準的な校訂テキストをほぼ所有しているが、ロシア帝国期・ソビエト時代・ソビエト崩壊直後にあたる時期、そしてごく近年刊行された校訂テキスト、代表的な刊本・写本の影印本、研究資料類の一部を入手できていないので、これらを購入するか財団法人東洋文庫などで複写を入手する手段を講じる。モンゴル国、中国・内モンゴル自治区、ロシア連邦各地でしか入手できないものがある場合には、下記の原本閲覧の際に可能な範囲で購入あるいは複写の入手を試みる。

3-2. 原本閲覧 (平成 29~31 年度)

校訂テキストのほとんどは原本のモンゴル文字を活字に直したものであるが、単純な誤植によると思われる意味の通らない箇所や、モンゴル語以外の外国語を表記したモンゴル文字の原綴が活字では間違っして写し変えられている場合、行間に挟まれている挿入語句やチベット文字表記を省略したと思われる箇所がある。このような校訂テキスト上の疑問点を解消するため、特に影印本が刊行されていない 18・19 世紀年代記については、その最良の原本を所蔵する機関で確認作業をおこないたい。内モンゴル社会科学院図書信息中心、モンゴル国立図書館、ロシア科学アカデミー東洋文献研究所図書館、デンマーク王立図書館、財団法人東洋文庫での調査を予定している。

3-3. 17 世紀年代記の内容整理 (平成 29 年度)

17 世紀年代記の著者不明『アルタン・トブチ (quriyangyui altan tobči)』、『エルデニ・イン・トブチ』、『アサラグチ史 (asarayči neretü-yin teüke)』、『シラ・トージ (šir_a tuyūji)』、『ロブ

サンダンジン著『アルタン・トブチ (altan tobči)』を対象に、すでに所有している標準的な校訂テキストと先行研究を参照しながら、その内容の整理と理解を進める。校訂テキストに疑問のある場合には、ウランバートルで刊行された「17世紀モンゴル史料原典集」所収の影印によって確認する。

3-4. 18・19世紀年代記の読み込みと内容整理（平成29～31年度）

申請者がすでに所有している標準的な活字本校訂テキストによって、著者と著年が明確な18・19世紀年代記の成書の古いものから順に読み込む。この段階では、先行研究を参照しつつ、その内容と著者の出自・著作地・官職僧位など著者と著述の環境を理解することに主眼を置く。この年度は、『ガンジス河の流れ』(GU)、『蒙古世系譜』(MBOT)、『金輪千幅』(AKMK)、『水晶の数珠』(BE)の内容整理から始め、平成30年度内に、メルゲン・ゲゲン著『黄金史』(MeAT)、『水晶の鏡』(BT)、『イシバルダン著『宝の数珠』(IsEE)、『真珠の数珠』(SE)、『ガルダン著『宝の数珠』(EE)の内容整理を終えることを目標とする。平成31年度には、「17世紀年代記の内容整理」と「18・19世紀年代記の読み込みと内容整理」の結果を用いて、18・19世紀年代記の記述を、先行するモンゴル語年代記（17世紀モンゴル語年代記）やモンゴルの歴史伝承より継承した情報、漢籍・チベット史書・著者固有の情報源より追加した新たな情報に腑分けし、その配列方法を整理しながら、著者の歴史観を発見する。

3-5. 18・19世紀年代記の年代記間比較（平成32年度）

「18・19世紀年代記の内容の分類・分析」の結果を、18・19世紀年代記それぞれの間で比較して、その異同を明らかにする。

3-6. 研究のとりまとめ（平成32年度）

上の「18・19世紀年代記の年代記間比較」の結果を踏まえ、18・19世紀年代記の記述内容の継承と変容を明確にしつつ、18・19世紀年代記に通年代記的・通時的な位置づけを与え、しかるべき形で刊行する（島根県立大学北東アジア地域研究センター紀要『北東アジア研究』別冊を予定）。

4. 研究成果

上記の計画は、一部の文献所蔵機関から複製許可を得られず、それに対応するため、できる限り長く文献所蔵機関に滞りながら閲覧と書写に当たろうとしたものの、コロナ禍により海外渡航が不可能となったため、3-1と3-2にかかる研究が進展しなかった。本研究には原典批判なしに進められない部分があるため、事態の回復を待ちながら令和5（2023）年度まで期間を延長したが、状況の改善がみられなかったため本研究を終了することとした。このことによって、残念ながら、本研究での目的・課題はいずれも所期のところには達しなかったと評価せざるを得ない。

モンゴル語で書かれた最古層の歴史的著作は、13世紀中盤に成ったと思われる『元朝秘史』である。これは、上天の定めによって生まれたモンゴル人の伝説上の始祖ボルテ・チノよりテムジン（後のチンギス・ハン）誕生までの歴史、チンギス・ハンの一代記、チンギス・ハンを継いだオゴタイの半生記を内容とする。この『元朝秘史』の後を継いで現れたモンゴル語史書は、16世紀末に成ったと考えられている『チャガン・テウケ』であり、この間には300年もの空白がある。

ここで、この約300年間のモンゴル史に起こった重大な出来事を概略的に挙げておく。モンゴル人が中原に立てた王朝である元朝のハーン、トゴンテムルが、明の太祖朱元璋の差し向けた北伐の軍を避けて1368年に首都の大都（今の北京）を脱出した。この後のモンゴル人の中では中央アジアのムスリム勢力や明朝の干渉もあって有力な王侯による内訌が絶えず、強大な権力を振るうハーンが現れなかった。そのような中、15世紀末にほぼ現在の内モンゴルとモンゴル国に相当する領域を回復したダヤン・ハーンが現れたが、ダヤン・ハーンの死後は再び有力王侯がハーンの権勢を上回る実力を振るうようになった。そのような有力王侯の一人に、現在の内モンゴルの中部に拠ったアルタンという者がおり、16世紀前半から強大化した。アルタンはその前半生には、拠点とする内モンゴル中部の東西南北に向けて精力的な軍事行動を展開したが、晩年の1570年代に入ると、明朝と和平を結び、チベット仏教に心を寄せ、自ら青海湖の畔にまで出かけてダライラマに帰依し、現在の内モンゴル自治区の首府が置かれているフフホトを仏教の一大拠点に発展させ、1582年に死んだ。アルタンの帰依ののち、チベット仏教はモンゴル人の間に急速に伝播し、今日もなおモンゴル人の主たる宗教となり続けている。この約300年の時期、モンゴルは、有力王侯や外の勢力による内訌や混乱とダヤン・ハーンによる一時の安定を経て、アルタンの晩年になって中原の明朝との和平と仏教の伝播を経験していた。

『チャガン・テウケ』が編まれたのは、このアルタンの仏教帰依のすぐ後のことであった。『チャガン・テウケ』は、インドからチベットを経てモンゴルに仏教が伝わり、それを国教に定めた元朝のフビライの治政を記したものである。このような内容を持つ『チャガン・テウケ』が編まれたのは、アルタンが仏教に帰依したこ上1992〕そして、『チャガン・テウケ』の後には、上にその題名を掲げた各種のモンゴル年代記が編まれるようになった。これは、チベットに蓄積さ

れた仏教史の知識と情報が、仏教とともにモンゴルにもたらされたからであると考えられる。17世紀に入ってから成ったモンゴル年代記のほとんどには、宇宙と人間そして人間界はいかに成ったか、仏教はいかにしてインドのマガダの地に現れたか、その仏法を護持したインドの聖王たちや高僧らはどのような事績を残したか、仏教がインドからチベットにどのように伝播し、チベットの聖王たちや高僧らはどのような事績を残したか、チベットの王の末裔はいかにしてモンゴルの地に到来して「蒼き狼」の血を引くモンゴル人たちを統べ、チンギス・ハンの誕生を迎えたか、といった内容が記されている。このような仏教史的情報は、現存最古のモンゴル語による歴史記述である『元朝秘史』には存在しないものであり、チベット由来の知識を援用して初めて記述可能なものである。また同じく17世紀以降のモンゴル年代記の多くに見られる、チベット仏教の高僧を帰依処としたフビライ・ハーン以降の元朝諸帝の事績もチベット由来の史的情報であると見られるところから、モンゴルのハーンらの仏教的事績にかかる記述は、その源泉をチベット史書に負っていると考えるべきであろう。

一方、仏教とは無縁の歴史物語のような記述もモンゴル年代記には存在する。それは、チンギスの事績や大都を脱出したトゴンテムル・ハーン、そしてモンゴルの混乱期とそれを収めたダヤン・ハーン以降のモンゴルのハーンやアルタンに代表される有力王侯の事績を記した部分に看取される。このような記述の史料的源泉は明らかにしえないものが多く、おそらくはモンゴル人の歴史的口承文芸であろうと推測されている。

このように、アルタン期のチベット仏教伝来は、モンゴル史を仏教弘通史の中に位置づけ、その中に『元朝秘史』や口伝に由来するモンゴル独自の歴史を寄せ集めた形のモンゴル年代記の成立を可能にした。これまでのモンゴル年代記学が、17世紀モンゴル年代記を中心的な興味の対象としてきたのは、ひとえにそれらが『元朝秘史』以降ながく現れなかったモンゴル語で書かれた歴史書であるという理由によるところが大きいと思われる。また、『元朝秘史』を祖型とするモンゴルの歴史記述とは大きく異なり、モンゴル人の歴史をインドにまで遡らせて仏教弘通の歴史として説きだしたという、モンゴル人の歴史記述の劇的な変化にも研究上の興味が集まりやすかったと考えられる。

アルタンの後継者たちの権勢は長くは続かなかったが、それによってモンゴル年代記の編纂は断絶しなかった。アルタンの後継者たちがまだ勢力を守っていた17世紀初頭、モンゴルの政治的な最高権威であるハーンの位を1603年ごろに継いだリグデン・ハーンが勢力の回復に乗り出した。リグデン・ハーンはアルタンが帰依したダライラマの宗派とは異なる派のチベット仏教に依ったが、熱心な仏教徒に変わりはないので、モンゴルにおけるチベットからの仏教史的知識の受容は断絶しなかったと思われる。しかし、リグデン・ハーンは勢力拡大は周囲のモンゴル王侯には受け入れられず、モンゴル諸部のうちもっとも東に位置する王侯らは、当時勢力を伸張させていた満洲のヌルハチと同盟関係を結び始め、モンゴル諸部に徐々に満洲の政治的影響が強まっていった。そのような情勢下、リグデン・ハーンは西部への遠征に力を注ぎ、1628年にはフフホトを占領してアルタンの後継者を滅ぼしたが、1634年に青海地方の手前で病没した。リグデン・ハーンが西方に転出している間のモンゴルは、ヌルハチを継いだホンタイジに制圧されており、帰還する場所を失ったリグデンの息子は1635年にホンタイジに降った。これを契機にモンゴル人は満洲（後金国、清朝）の統治下に入ってゆく。いわゆる17世紀モンゴル年代記のうち、著者不明『アルタン・トブチ』はモンゴルが清朝の統治を受けるようになった時期以前に成ったものではないかと考えられているが、それ以外は清朝統治期に入ってから成ったものであるが、時代が進んで18・19世紀のモンゴル年代記には17世紀のものには見えない特徴が存すると認められている。それは、17世紀前半にモンゴル人が満洲人の清朝の統治下に入って以降、モンゴル人知識人が満洲語に習熟し、同じく清の統治下に入った漢人とチベット人の言語と文化にも習熟し、それらの歴史書から吸収した新しい知識と叙述法が強く反映されているという点である。『資治通鑑』系の編年体史書や正史の『金史』・『元史』やその訳本によって中国上代から元朝の歴史を記述し、区切りのよいところで評語を添えるなどの漢文史籍の影響が時代を降るに従って濃厚になる。また、前代に増してチベット語で書かれた王統史や教法史を盛んに利用するようになって、インド・チベット・中国・モンゴルの仏教弘通史の量が格段に多い年代記も存在する。さらに、先行する17世紀モンゴル年代記の記述を再利用した部分も多い。このように、清朝の統治下に入ったモンゴル人の歴史学が、同じようにその統治を受けるようになったチベットと漢地の歴史学的方法の影響を、前代に比してより強く受け、それを摂取するようになった。とりわけ、18・19世紀モンゴル年代記に強くあらわれているのは、それ以前のモンゴル年代記にたいする痛烈な批判の姿勢である。信用に値しない旧来のモンゴル年代記の記す説話的要素を可能な限り廃する批判を支えたのが漢語史書であった。古代中国の歴史とモンゴル史を連結させる発想の充実、一部漢籍に見える賛や注記を用いる記述方法の採用などにその影響の大きさが理解できる。また、チベット仏教に関する知識はいわゆるチベット仏教年代記に依拠した部分と高僧伝を多用した作品が登場したことにも18・19世紀モンゴル年代記がもと特徴とすることができる。そして、モンゴル年代記が固有の特徴を帯びるのは、作者が関与した地域のとくに王公を中心とした政治史的な記述であり、このような部分には地域の公文書を用いたと思われる。上述のような構造は18・19世紀モンゴル年代記にほぼ共通したものと見えるのだが、漢語史書とチベット仏教年代記、高僧伝によって史料としての信憑性を高めようとするあまり、記述全体には固有の特徴が見いだせなかったり、17世紀のモンゴル年代記がもつ非整合性を清算することができないままに継承している面があることは指摘しておかねばならない。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 井上治	4. 巻 29
2. 論文標題 ブリヤート人歴史家の歴史記述 モンゴルとロシアの描写を中心に	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 北東アジア研究	6. 最初と最後の頁 183-203
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計7件（うち招待講演 2件/うち国際学会 5件）

1. 発表者名 井上治
2. 発表標題 W.コトヴィッチが撮影・収集した1910年代のモンゴルの写真
3. 学会等名 日本・モンゴル外交関係樹立50周年記念特別展「邂逅する写真たち モンゴルの100年前と今」（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 井上治
2. 発表標題 日本所在のモンゴル関係資料
3. 学会等名 世界に散ったモンゴルの遺産：文書・文字資料国際学会（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 井上治
2. 発表標題 近代のモンゴルで書かれたモンゴル中世史について
3. 学会等名 NIHU 島根県立大学拠点主催シンポジウム プロジェクト『北東アジアにおける近代的空間の形成とその影響』総括シンポジウム（国際学会）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 井上 治
2. 発表標題 モンゴル語の白樺写本 ユーラシア古代史料の例として
3. 学会等名 Tatarstan-Japan: history and prospects of relationship on the occasion of the Year of Japan in Russia (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 井上 治
2. 発表標題
3. 学会等名 ： o - , yy ” (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 アガタ=バレヤ-スタジンスカ・井上 治
2. 発表標題 Mongolian Treasures from Pander E Collection at the Jagiellonian Library
3. 学会等名 7th International Conference of Oriental Studies: Collections of Texts and Artefacts (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 アガタ=バレヤ-スタジンスカ・井上 治
2. 発表標題 Tagging to the photos of W. Kotwicz 's collection
3. 学会等名 The Workshop for International Project “Analyzing Historic Photographs of Scientific Expeditions and Missionaries to Mongolia” (国際学会)
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計7件

1. 著者名 李 曉東、李 正吉	4. 発行年 2022年
2. 出版社 明石書店	5. 総ページ数 674
3. 書名 論集 北東アジアにおける近代的空間	

1. 著者名 李曉東, 李正吉	4. 発行年 2022年
2. 出版社 秀成資訊科技股[イ分(fen)]有限公司	5. 総ページ数 514
3. 書名 東北亞近代空間の形成及其影響	

1. 著者名 Li Syaodong, I Jeong-gil	4. 発行年 2022年
2. 出版社 Somyeong Chulpan	5. 総ページ数 866
3. 書名 Dongbug-a Geundaegong-gan-ui Hyeongseong-gwa geu Yeonghyang.	

1. 著者名 島村一平	4. 発行年 2022年
2. 出版社 国立民族学博物館	5. 総ページ数 199
3. 書名 日本・モンゴル外交樹立50周年記念特別展 邂逅する写真たち モンゴルの100年前と今	

1. 著者名 岡洋樹、井上治、橘誠、その他	4. 発行年 2020年
2. 出版社 東北大学東北アジア研究センター	5. 総ページ数 244
3. 書名 移動と共生の東北アジア：中蒙露朝辺境にて	

1. 著者名 井上 治	4. 発行年 2018年
2. 出版社 山川出版社	5. 総ページ数 413
3. 書名 『中央ユーラシア史研究入門』（「元朝北遷からリグデン・ハーンまで」を分担執筆）	

1. 著者名 小松久男、荒川正晴、岡 洋樹	4. 発行年 2018年
2. 出版社 山川出版社	5. 総ページ数 420
3. 書名 中央ユーラシア史研究入門	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------